

おおさきぜき あながわようすい
大前堰と穴川用水の歴史

大前堰と穴川用水は、五行川を水源として真岡市から茨城県筑西市の一部を含む約1,300ヘクタールの農地へ農業用水を供給する施設で、防火用水や地下水涵養等の役割も担っています。

堰の設置、用水路開削の時期は不明ですが、大前神社が所蔵する元禄6（1693）年の「元禄古絵図」に描かれていることから、長い歴史があることがわかります。正徳2（1712）年の『杭堰』改修に関する材料・人夫等を細かく記した古文書や、江戸時代後期の二宮尊徳（金次郎）による用水路等の改修記録も残されており、歴史のかつ規模の大きな農業水利施設として、栃木県を代表するものの一つです。

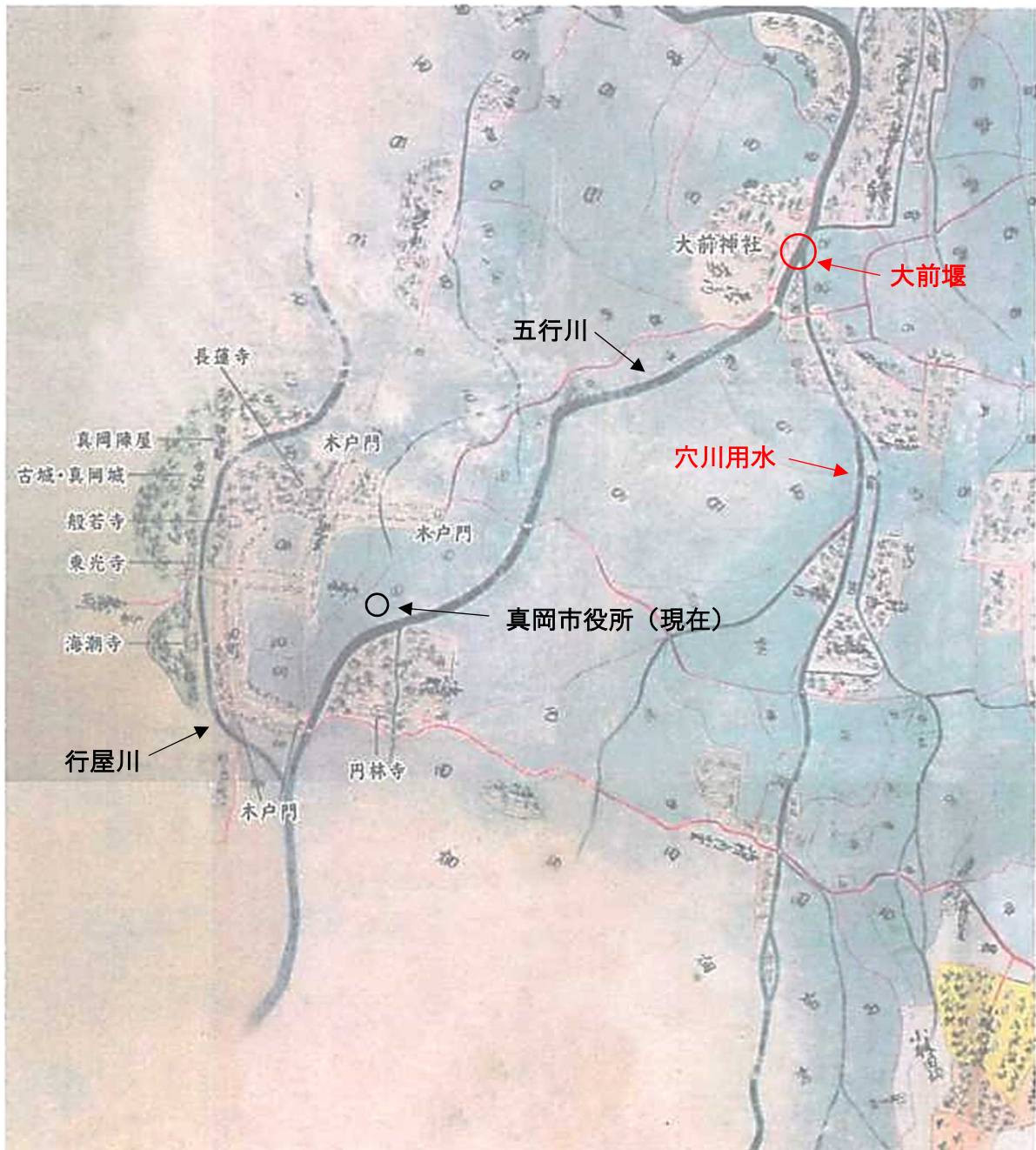


図1 元禄古絵図（元禄6（1693）年、大前神社所蔵） ※一部加筆

大前堰の歴史

大前堰は、江戸時代元禄期、既に現在の場所（真岡市東郷）に設置されていたようです。当時の堰は木材で作られた固定堰、いわゆる杭堰でした。このため、記録に残っている改修以外でも、おそらく毎年、田んぼの代掻き前に、細やかな修繕がなされていたと思われます。

電力で起伏する鋼製の可動堰となったのは、今からおよそ半世紀前、昭和 38（1963）年です。現在の堰は、令和 3（2021）年に全面改修を終えた 2 代目の鋼製可動堰となります。

正徳 2（1712）年の改修

東郷村の名主文書「御用留」に、「堰堀杭ソタ之事、是ハ大前方へ御林ヨリ杭ソタ渡リ」と記されており、真岡奉行所が真岡市の大田和にあった直轄林から、材料となる木杭・粗朶（そだ、細い木の枝等を束ねたもの）を提供したことがわかります。改修に当たっては、町会が分担して人夫を出していたことも記されています。

文政 10（1828）年の改修

江戸時代後期、小田原藩や幕府桜町領（旧二宮町）などで財政再建・農村再興等に手腕を発揮した二宮尊徳（金次郎）の日記に、穴川用水の改修の記録とともに、大前堰の改修について記されています。

この記録から実証することはできませんが、材木の量や後年の文献等から推測すると、尊徳自らが設計などについて指揮をとったと考えられています。

また、堰の普請に当たっては、当時の島村と東沼村が世話役となり、穴川用水の水を利用する田町、荒町、島、小林、東沼、物井、高田、鹿、桑ノ川から人足を出すこととなっていました。

松枝	同三尺杭	同四尺杭	同六尺杭	栗九尺杭	重木	名称
七十駄	二百七十八本	百五十三本	六十五本	三十五本	六本	物井分
二十五束	二百十四本	八十九本	六十五本	二十八本	六本	東沼分

表 1 大前堰普請の材木
（二宮金次郎伝より抜粋）

昭和 38（1963）年の改修

改修前の堰は、木杭を用いた固定堰で、昭和 11（1936）年に発行された二宮先生遺蹟案内によれば、重木 9 本で落口 8 間半（約 15.4m）、斜面 12 間（約 21.7m）、落差 5 尺（約 1.5m）という規模でした。これが、当時の鬼怒川水系河川改修事務所による五行川の河川改修事業に伴って、電力で起伏する鋼製の可動堰となりました。

堰は、洪水時であっても土砂が用水に流れ込みにくくしたとされる二宮流の配置で、穴川用水の取水口よりも 3 間（約 5.4m）ほど下流に築造されていましたが、基本とする考え方は改修前後で変わることなく、現在も踏襲されています。



図 2 固定堰であった頃の大前堰
（二宮先生遺蹟案内から引用）



図 3 平成 29（2017）年時点の大前堰

令和3（2021）年の改修

昭和の改修から半世紀を経過し、堰の起立・転倒等に不具合が生じていたため、栃木県が事業主体となり、護床改修等も含めた全面改修が実施されました。樋門は新たにステンレス製としつつ、背面支持方式による自動転倒ゲートといった構造は、そのまま踏襲されています。

工事は、晩秋から早春にかけての渇水期に右岸側と左岸側の2期に分けて行われ、総事業費は3億1,000万円でした。

令和2（2020）年度には、栃木県芳賀農業振興事務所の主催により、堰や地域にゆかりの深い関係者の出席のもとで「大前堰の将来を考える会」が開催（計3回）され、地域で守りゆく機運をどう高めるか、第1期工事で生じた課題をどう解決するかなど、話し合いがされました。



図4 令和の改修直後の大前堰

穴川用水の歴史

穴川用水は、大前堰によって引き入れられた五行川の水を農地へと運ぶ水路であり、地域では穴川と呼ばれて親しまれてきました。大前堰と同様にその歴史は古く、用水路に設置された取水堰にまつわる逸話、二宮尊徳による数々の改修など、多くの記録が残されています。

昭和29（1954）年度から10年にわたり実施された栃木県による用排水改良事業により大規模改修が行われ、今日に至っています。

八本堰での水争い

八本堰は、桜町陣屋（現在の真岡市物井）の北、柳川との合流地点の上流付近に造られた、新堀川へと分水する堰です。当時の物井村と下流に位置する高田村との水争いが絶えず、正徳元（1711）年に公儀の裁定で杭8本とされたことから、このような名称となりました。

二宮尊徳の時代にも度々水争いが起こり、「二宮先生遺蹟案内」にも、次のような大正時代の記録が残されています。

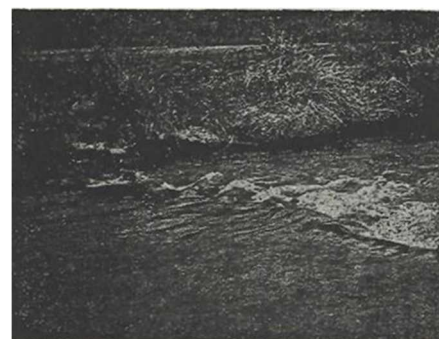


図5 コンクリート造りとなる前の八本堰
（二宮先生遺蹟案内から引用）

近年に至りても、大正2年7月、従来の杭木朽ちたるを以て、物井方にて杭木打換をなしたるを異議とし争いとなり、大正8年6月にも、既に示談整へありし杭木が長すぎるとて、高田方面にて、切り捨たるに因り双方争を生じたるも幸ひ示談、事済みとなりしが、昭和6年6月物井方にて「コンクリート」に建設せしに因り、高田方にて之を破壊せしかば、双方より現場に詰めかけ、今にも血の雨降らさんばかりに、一週間余に亘り争ひしが、真岡警察署長の仲裁により落着して爾後その事なきは幸いである。

～ 二宮先生遺蹟案内より引用 ～

二宮尊徳による改修

江戸時代後期、二宮尊徳が尽力した水路整備や堰の改修・普請については、尊徳自身が残した日記などから知ることができます。

この尊徳による改修で、代表的な取水堰の一つに挙げられるのが、西幹線用水にかかる三宮堰です。川幅6間（約10.9m）のところへ切口2尺5寸（約0.8m）の丸太が川の流れに対して一本通して直角に据えられ、それを段々に高くして3本あまりは水に浸かっていたそうです。この丸太を長さ4尺（約1.2m）の大石と大きな杭で押さえてあったと記録されており、現代の鉄筋コンクリート構造に置きかわるまで、増水にも耐えて100年近く存在していました。

現在は、昭和期に改修された約6mのコンクリート造りの堰となっています。

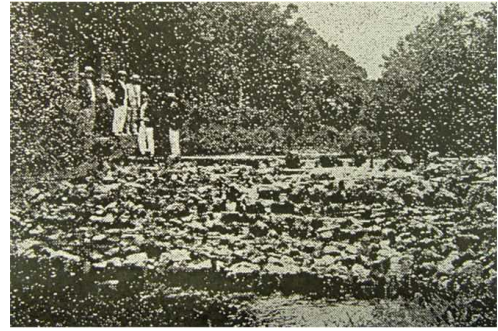


図6 コンクリート造り以前の三宮堰
(二宮先生遺蹟案内から引用)

昭和期の大改修

昭和29(1954)年度から昭和39(1964)年度にかけて、栃木県が事業主体となって「穴川沿岸及び山前地区用排水改良事業」が行われました。五行川からの取入口を鉄筋コンクリートの可動堰としたほか、用水路約10.1kmをコンクリートブロック張りとし、分水工が22か所から15か所に統合されています。幹線用水を東西幹線へと分水する背割り式の中堀堰（三又堰）や、いずれも幅が違う4連の取水口が特徴的な西幹線の六間口堰などが改修されました。総事業費は、当時の金額で1億3,870万円でした。

改修の過程では、杭堰からコンクリートと鉄扉による堰へ構造が変わったタイミングと1月から5月にかけての極端な少雨が重なった昭和33(1958)年、長塚堰の上流側・下流側で、県や警察を巻き込んだ大きな水争いも起きました。

なお、施設管理を担っている穴川土地改良区連合は、当時の真岡、二宮町物井、鹿、桑の川、高田、原分、阿部品、河間の土地改良区により、この時に組織されています。

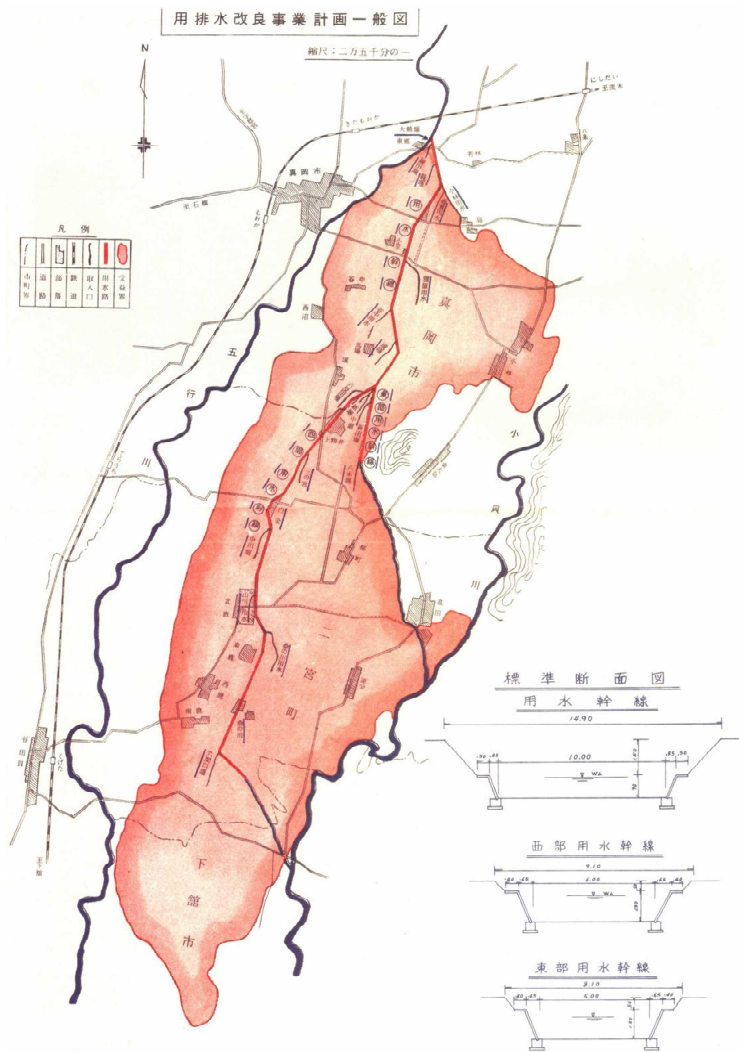


図7 昭和期大改修の計画一般図

語り継がれてきた民話・逸話

長い歴史をもつ大前堰と穴川用水には、民話・逸話が残されています。ここに、そのいくつかを紹介합니다。

黒髪の女

大前堰は杭堰でしたが、流れが強くてたびたび流出してしまったため、女性が犠牲となり、いわゆる人柱になったという話です。

大前の鯉

下館藩の侍が魚屋で買った鯉をさばいたところ、流れ出た血が「大前大権現」という文字となったため、怖くなって大前神社で訳を話し、祈祷してもらったという話です。大前堰あたりの五行川の鯉は、神様の使いとして食べてはならないといういわれがあります。

乳たれの堰

昔、栄養不足でお乳が出なかった方が、大前堰に流れてきた栄養豊富な野菜などを拾って食べることで乳がたくさん出て、子どもが良く育ったという話です。

お助け堀

谷中堰から境堰にかけて、「お助け堀」と呼ばれていた水路が昭和期の改修まで存在し、地域では、二宮尊徳が水争いを避けるために造ったとして語り継がれてきました。上流で一定の水位に達すれば、自然と水が下流にこぼれ出るといった構造だったそうです。

～ 栃木県芳賀農業振興事務所職員による真岡市東沼住民2名からの聞きとり ～ (平成20(2008)年頃のメモをもとに書き起こし)

穴川用水の東側にあり、構造は土水路で、谷中堰の水位が上がると自然に水が入るようになっていた。取水口は幅6尺(約1.8m)程度で下流へいくにつれて広がっていて、広いところで幅10尺(約3m)はあった。深さは1mには満たず、堀の途中には水を取水するところはない。

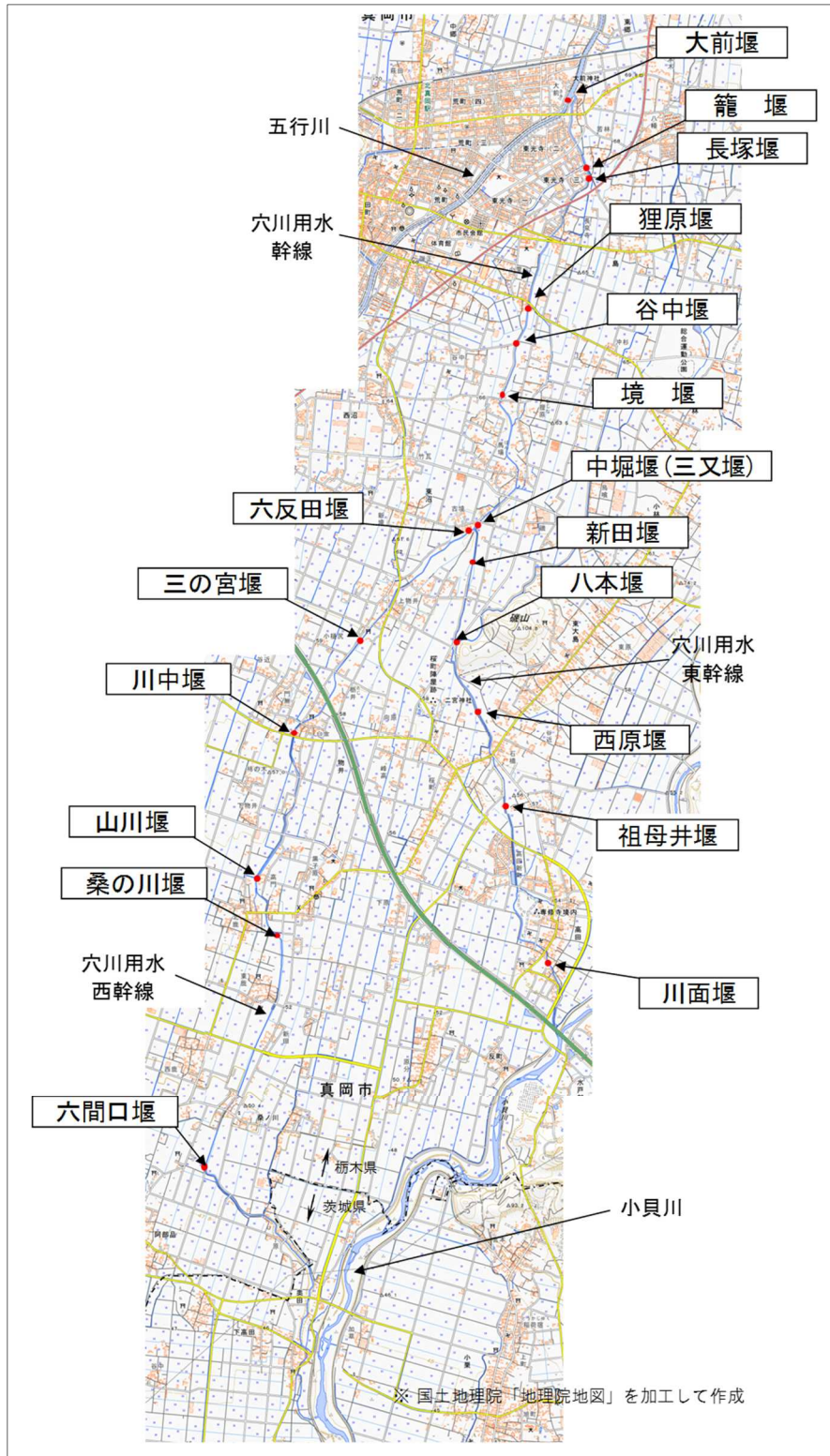
皆が「お助け堀」と呼んでおり、毎年、田植え前、そして用水不足の時、境堰の関係者が堀さらいを行っていた。昭和30年代の穴川用水改良事業でコンクリート堰ができて必要がなくなり、なくなった。二宮尊徳先生がつくったと聞いている。「谷中堰の集落」と「境堰の集落」が水争いをしないように作ったものだと思う。

穴川用水は1年中水がきれいで、お助け堀にも1年中水が流れ、魚釣りしている人も結構いた。



図8 お助け堀と 考えられる水路跡
(平成9・10年ほ場整備事業出来高図から作成)

< 大前堰と穴川用水 位置図 >



< 引用文献等 >

- 正徳 2 (1712) 年 「東郷名主文書御用留」 東郷村善左衛門
- 昭和 11 (1936) 年 「二宮先生遺蹟案内」 佐藤行哉、発行：下野櫻町遺蹟保存會
- 昭和 54 (1979) 年 「栃木県土地改良史」 栃木県土地改良事業団体連合會
- 平成 15 (2003) 年 「二宮金次郎伝」 上原祥男

令和 4 (2022) 年 2 月 資料作成：栃木県芳賀農業振興事務所
 作成協力：穴川土地改良区連合、真岡市、大前神社